

2004 年度 国際ユース作文コンテスト受賞者

参加国数：111 カ国

応募総数：4,012 作品（子どもの部 2,558 作品、若者の部 1,454 作品）

文部科学大臣奨励賞（最優秀賞）（各 1 点）

<子どもの部>

- 『僕は音楽の創造者』
丹部 アレキサンダー 大裕
(熊本県&米国) 13 歳

<若者の部>

- 『愛を込めて』
蘇 杭 (中国<フランス在住>) 24 歳

優秀賞（各 2 点）

<子どもの部>

- 『多くの人に言葉を心を伝えたい』
岡田 航洋 (日本<スイス在住>) 11 歳
- 『児童虐待を無くすために僕の長所をいかす』
S・S・リシャッド (バングラデシュ) 12 歳

<若者の部>

- 『聴いてくれてありがとう』
栗山 明 (京都府) 22 歳
- 『暴力の文化の中で非暴力に生きる』
バーワード・ジョンソン (リベリア) 25 歳

入選（各 5 点）

<子どもの部>

- 戸毛 歩 (東京都) 13 歳
- マウ・アカ・マウ・マウ・アウン・チョー・テ
(ミャンマー) 13 歳
- カイン・タラフィ・ディン (ミャンマー) 14 歳
- グネシュ・ディヴァ (モーリシャス) 14 歳
- サラ・ローズ・フーカー (モザンビーク) 15 歳

<若者の部>

- 宮永 幸則 (兵庫県) 17 歳
- 横山 亮 (埼玉県) 18 歳
- ムハマッド・ドニー・エリヤスタ
(インドネシア) 19 歳
- アンナ・マズレック (スウェーデン) 20 歳
- ジム・ハスケ (カタール国) 25 歳

佳作（各 25 点）

<子どもの部>

- シャーソン・あみ
(日本&米国<米国在住>) 7 歳
- ケンジ・S・カスル
(フィリピン) 12 歳
- ジャニカ・シュタイナー (ドイツ) 12 歳
- ナターシャ・ホトウン (中国香港) 12 歳
- ハナー・グリーン (米国) 12 歳
- 福田 健一郎 (東京都) 12 歳
- メリサ・ヒセル・ペレス (アルゼンチン) 12 歳

<若者の部>

- 伊東 亜祐美 (日本<英国在住>) 16 歳
- サンティアゴ・G・バスケス
(アルゼンチン) 16 歳
- チャリッサ・イカサス (フィリピン) 16 歳
- トーマス・イゲム (ケニア) 16 歳
- エプロニア・FR・アンジェロス・ファシー・ア
ゼル (エジプト・アラブ) 17 歳
- ジャベリヤ・ハサン (モーリシャス) 17 歳
- チョイ・ヘナ (韓国) 17 歳

- 姜 怡君 (台湾) 13 歳
- マハデオ・ケビナ・シャクティ (モーリシャス) 13 歳
- アマンダ・チョン・ウェイチェン (シンガポール) 14 歳
- アヤンティ・インディラ・マタラゲ (スリランカ) 14 歳
- 神園 藍 (鹿児島県) 14 歳
- クルニッグ・アルフォンス (ドイツ) 14 歳
- 齊藤 未央 (日本<米国在住>) 14 歳
- 佐戸 優希 (山口県) 14 歳
- セリーヌ・タン・シェ・ジア (マレーシア) 14 歳
- ジャベリア・アリ (パキスタン) 14 歳
- 早田 睦 (東京都) 14 歳
- 水谷 千智 (東京都) 14 歳
- 山口 友未 (東京都) 14 歳
- シャーリー・ウィン (ミャンマー) 15 歳
- ミズキ・サトウ (日本<米国在住>) 15 歳
- サブリーナ・スゼト・ファイ・リン (シンガポール) 15 歳
- 西丸 ひとみ (東京都) 15 歳
- ローラ・ギディ (ニュージーランド) 15 歳
- デイス・バイデカスネ (ラトビア) 17 歳
- ケネディ・カルビン・クレイグ・ペンバートン (セントクリストファー・ネービス) 18 歳
- ナタリー・ターナー (アイルランド) 18 歳
- ベラパット・パリヤウォン (タイ) 18 歳
- 森谷 圭介 (日本<英国在住>) 18 歳
- アーチャナ・アスンディ (シンガポール) 19 歳
- ヤップ・スイ・リン (マレーシア) 19 歳
- マリアム・アブドルバリ・ゴザル (アラブ首長国連邦) 20 歳
- 山崎 理絵 (兵庫県) 20 歳
- レムジ・セージ (カナダ) 20 歳
- リンドセイ・ミッシェル・ジョーンズ (米国) 21 歳
- ヌル・シーナ・ビンティ・バリルディン (マレーシア) 22 歳
- エマニュエル・アンカー (ガーナ) 24 歳
- ジェラルディーン・ボーグ (マルタ) 24 歳
- マドフリー・ジョイスリー (モーリシャス) 24 歳
- ミハイル・ゼンチェンコフ (ロシア) 24 歳
- 千葉 史子 (岩手県) 25 歳
- レベッカ・L・ゴードン (米国) 25 歳

努力賞

<子ども部> (14点)

- ベイツ 大和 ブライアン (日本&オーストラリア <オーストラリア在住>) 8 歳
- ゴー・シン・ジュアン (シンガポール) 11 歳
- トン・イ・リン・アイリーン (シンガポール) 13 歳
- 加納 七海 (日本<ルーマニア在住>) 13 歳
- 浜野 千翔人 (東京都) 13 歳
- 宮城 萌夏 (日本<台湾在住>) 13 歳
- 山田 夏菜 (愛知県) 13 歳
- イー・インファイ (シンガポール) 14 歳
- エミリー・チャン・カー・ヤン (シンガポール) 14 歳
- 山下 春香 (東京都) 14 歳
- 葉 航之 (神奈川県) 14 歳

<若者部> (13点)

- ジェシカ・クーラー (ドイツ) 16 歳
- 平野 瑞穂 (カナダ) 16 歳
- ダルガイエ・ザリーン (モーリシャス) 17 歳
- ラマサミー・ビナシャ (モーリシャス) 17 歳
- ポピラス・ラスタウスカス (リトアニア) 18 歳
- アウン・リン (ミャンマー) 20 歳
- シャシュワット・クマル・グプタ (インド) 20 歳
- 加藤 聡 (神奈川県) 21 歳
- レーナ・デビ・ドゥニー (モーリシャス) 21 歳
- ボヒッド・ガフロフ (ウズベキスタン) 23 歳
- サルギシャン・ガヤネ (アルメニア) 24 歳
- レオナルド・ブラセンシア (アルゼンチン) 24 歳
- エドゥアルド・ムンタネル・ベリック (スペイン) 25 歳

- ロー・ユーク・イーン (シンガポール) 14 歳
- ヒナ・アクバル (パキスタン) 15 歳
- 三上 綾子 (千葉県) 15 歳

学校特別賞

該当校なし

2004年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 文部科学大臣奨励賞（最優秀賞）

僕は音楽の創造者

（原文は英語）

丹部 アレキサンダー 大裕（13歳）

熊本県&米国<米国在住>

アランデル・アカデミー

（ホームスクール）

母は僕のことを、とてもおしゃべりで、目立ちたがり屋で、声が大きすぎると言います。家族にうるさがられるこの性格は、実は僕が自分の夢を実現するための長所なのかもしれません。自分のことを考えてみると、僕は伝統やクラシック音楽を好み、型にはまる事が嫌いという独特な個性を持っています。僕は、舞台に立つ時、自分は世界の頂点にいるのだと感じます。観客は僕に笑顔を送ってくれます。僕には、自分は観客を楽しませる能力があるという自信があります。僕の夢は、音楽が自分にしてくれたように、音楽を通して世界の人々を鼓舞することです。



我らは音楽の創造者

我らは夢追い人・・・

我らは世界を動かし揺さぶりつづける者

アーサー・ウィリアム・エドガー・オーショークネッシーの抒情詩

「我らは音楽の創造者」より

初めてパヴァロッティの歌声を聴いた時、僕は彼のようにになりたいと心底思いました。彼の歌声は僕の心に息吹を吹き込みました。僕は、未来に希望を覚えました。興奮しました。そして、自分の中から、夢を追い求めようという気持ちが沸き出てくるのを感じました。僕達は、非常に素晴らしいものや人に触れると、自分にもどんなことでも可能なのではないかと思うことがあります。素晴らしい芸術作品や並外れた演技は、僕達の心を畏敬の念や高揚感で満たして、会場を去る頃には、自分も同じように潜在能力を開花できるのだと信じさせてしまいます。

僕は、聖歌隊の少年歌手の一人として、ハンガリーのオペラ団の「トスカ」公演の舞台で歌うという特別な機会を与えられました。舞台裏ではひどくドキドキしていましたが、観客を前にし、オペラのメンバー達の存在を身近に感じると、自分の中から一気に自信が湧いてきました。舞台こそ僕の居

たかった場所なのです。僕は、自分が舞台に立つことと、自分の歌声と自分の音楽への愛情を組み合わせることで、人々の心を鼓舞し希望と幸福感を与えることが出来るのではないかと思います。

僕は、エリック・リッデルの本を読むまで、自分がエンターテインメントの世界を志すことなど本気で考えたことはありませんでした。エリックの家族は彼が宣教師になることを望みましたが、彼は自分には走る才能があると自覚し、ランナーになろうと決意しました。彼はレースを見に来た観衆に神の教えを説くことで、自分の才能を最大限に発揮したのでした。

先生達は、僕がバイリンガルで二つの文化背景を持つことから、将来通訳者になるだろうと思っています。昨年、僕は幾つかのコンサートやミュージカルで演技をしました。そして僕が感じたことは、自分はオペラかミュージカルの歌手になりたいということでした。近頃のほとんどのエンターテインメントには人間味が感じられません。僕は人と直につながることが必要だと感じています。インターネットは僕達をお互いにつないでくれますが、感情のつながりはありません。僕は、舞台上で歌い演じることで、もっと直接的に自分の感情を人々と分け合ったり、コミュニケーションをとったりすることが出来ます。劇場は自分の声と人格を表現する最高の場になります。

舞台だけが僕の選択肢ではありません。周りのみんなが言うように、僕はとてもおしゃべりです。おそらくバイリンガルだから人よりも2倍話すことがあるのでしょう。アメリカ人の母と日本人の父の間に生まれ日本で育てられたので、僕は自分の語学力を磨き通訳をするチャンスをとくさん与えられました。おしゃべりで常に舞台の中心で目立ちたいという性格が実は利点に成り得るということに、僕は大阪で行われた「世界子供水フォーラム」に参加した時に気づきました。オブザーバーとしての参加でしたが、数時間もしない内に、僕は幾つかの会合の通訳をしていました。参加者が58ヶ国から集まっていたこともあり、僕は日本と世界をつなぐちょっとした架け橋役を担ったのです。結局、僕は舞台の中央に立ち、他の参加者たちと一緒に「ウィー・アー・ザ・ワールド」(マイケル・ジャクソン、ライオネル・リッチー。1985年作)をリードして歌っていました。その時、僕の中には、多くの人々の心に直接触れるという何かを成し遂げた実感がありました。僕は、自分の歌声や音楽、自我を通して、周りの人々に喜びや幸福感を与えることが出来るということを知ったのです。

音楽や舞台芸術は世界の人々をつなぐ普遍的な形です。リズムやサウンド、歌詞、動作は、あらゆる国境を越えてメッセージを人々に届けることが出来ます。困難や心の痛みを感じた時、人は音楽を聴いて心を和ませられ、勇気づけられます。僕の場合、音楽によって自分の心配事から逃れることが出来ます。僕は、ミュージカル芸術やオペラ、伝統音楽の中にとっても強いインスピレーションを感じます。いつの日にか、舞台上での自分の存在感、歌声、音楽への愛情、二つの文化背景を持つ利点を組み合わせることで、夢を追いかける人々の心に息吹を吹き込み、希望や幸福感を与えることが、僕にはきっと出来るはずです。僕は、音楽を通して世界を揺り動かす人になりたいです。

愛を込めて

（原文は英語）

蘇 杭（スー・ハン）（24歳）

中国<フランス在住>

アンジェ科学商業高等専門学校

旅先のバルセロナで、道端に座って通りすがりの人々の肖像画を描いて過ごした後、マカオの孤児院での仕事に戻ってくると、「あなたは自分の長所を生かして、社会のためにどのように役立てたいか、作文を書いてください。」という広告が私の目にとまりました。

この孤児院でボランティアとして2年間働いていますが、私はこの仕事を愛をもって行っていると言えます。

私は、初めてこの孤児院を訪れた時のことをとても鮮明に覚えています。広い一つの部屋で、子ども達のグループが楽しそうに踊っていました。反対側では、別のグループが先生の後に続いて大きな声で朗読をしていました。

また部屋の隅では、年長生達が夕食のテーブルを準備している……。私は今まで、これ程まで調和に満ちた光景を見たことがありません。ここで働く人々のほとんどがボランティアで、もっと多くのヘルパーが必要だということを知り、私は真先にこの温かい家庭のような孤児院に加わりました。

私は子ども達と一緒に絵を描きます。基礎的な技術を教えながら、絵を描く時に一番大切なことは技術ではなく心であるということ子ども達に説明します。そうすると子ども達の作業にもますます熱がこもり、私が本当にうっとりするほど魅了されるすばらしい作品がたくさん出来上がるのです。またなぞなぞ大会を行うこともあり、私自身いろいろ頭をひねります。私が正解を言うと、幼い勝利者の顔にはかわいらしい喜びに満ちた表情が浮かびます。きっと私の顔もそうなっているのでしょう……。私はここにいるすべての子ども達と交流しています。そして彼らを愛しています。 — もしあなたがこのような光景を見たら、この子ども達が孤児だなんて想像がつくでしょうか？

毎日のように人々が子ども達を養子として引き取りにやって来ます。同時に、新たに私達の元へ送られてくる孤児もいます。愛は世界を鮮やかに飾ります。一方、憎しみは世界を破壊してしまいます。最近のバルセロナ旅行のことが思い出されます。私はそこでスペイン人の友達の中から肖像画の描き方を教わっていました。数多くのストリート・アーティスト達と出会いましたが、その中で一番素晴らしかったアーティストは、不幸にも最近起こったマドリードの列車爆破テロで、孤児になってしまった16歳の少年でした。絵を描いている時、彼の両目はきらきらと輝いていました。その目には明



らかに愛が溢れていました。ある日、自分の絵の中でどの線を消そうかと真剣に悩んでいると、「なかなかいいね。心を込めて描いているのがわかるよ。それが一番大切なんだ。」という優しい声が聞こえてきました。その少年でした。私は彼に感謝の言葉を述べ、彼の作品に対する私の印象を伝えました。彼は微笑みうなずきながら「芸術には愛が必要だ。人生にも愛が必要だ・・・」と言いました。もしあなたが私の立場だったら、この尊い少年をテロ攻撃の被害者だなんて想像がつくでしょうか？

最近の世界は、愛対憎しみ、平和対暴力など、極端な対照を為しているかのようです。どちらの側も消し去ることも出来れば、強めることも出来ます。私たちがこの対立の中に良い要素を与え続けたならば、悪い要素をもっと追い払うことが出来るのです。私は、この進化の過程において、自分のポジティブな性格を最大限に生かし、他の人に愛を伝えたいと思います。私は子ども達と一緒に歌うすべての歌に、愛を植え付けます。そして肖像画を描く一筆一筆に愛を込めます。私は自分の愛を他の人々に分け与えてあげたいのです。そうすればその人達も更に、もっと「他の人々」に自分達の愛を分け与えてあげることが出来るのです。私は、内なる太陽はその持ち主の心を温めるのみならず、その人に触れるすべての人々の心をも温めると信じています。私が周りの人々を愛せば、彼らも私のことを愛してくれるでしょう。良い要素を増やす小さな一歩に過ぎませんが、とても大切なことです。まるでEメールの転送のようです。あなたは自分の友達に転送するだけかも知れませんが、その累乗効果は計り知れません。あなたの友達の背後には別の友達がいるのですから、世界のネガティブな要素と闘うための大きな力が存在するのです。

私は自分が独りぼっちでないことを知っています。たくさんのボランティアや若者達が、その労力と愛をこの孤児院や様々な場所で捧げています。きらきらと輝く目があちらこちらにあるのです。私達は共にポジティブな要素を放ち、振りまいているのです。それはマカオやバルセロナからだけではありません。普遍的な慈愛は光を放ちます。

私は同僚の一人と連れ立って次の週のための買出しに出かけます。私達はいつものように公園にいる物乞いのためにランチを買ってあげます。孤児院へ戻る途中、既に前方からは楽しそうな歌声が聞こえてきます。青空では薄雲に向かって飛ぶ一羽のヒバリも歌っています。まるで聖歌隊の歌声のように。私達は平和と調和に抱かれています。それは世界の未来の姿を現しています。愛の力によって、世界が暴力やテロに破壊されることも、人が不幸にさいなまれることも無くなるのです。

多くの人に言葉を心を伝えたい

(原文)

岡田 航洋 (11歳)

日本<スイス・チューリッヒ市在住>

チューリッヒ日本人学校補習校

僕は日本語、英語、簡単なドイツ語ができる。これは、りっぱな長所だと胸を張って言えるけれど、決して僕の努力でできるようになったわけではない。3才でスイスに来て、家では日本語、幼稚園や学校では英語、近所の友達と遊ぶ時はドイツ語という毎日で自然に身に付き、気が付いたらしゃべっていた。ただ、耳だけで覚えたスイス・ドイツ語はかなりなまっているらしく、ドイツへ行ってアジア人の僕の顔で使うと、いつも笑われる。

僕は、ドイツ語で剣道を習っている。日本人が外人の先生から外国語で武道の心を学ぶなんて、おかしいと思う人がいるかもしれない。けれど、先生達はとても礼儀正しく、まじめに剣道をやっている。その真剣さはビンビン伝わってくる。先月、『チューリッヒ杯』という試合があり、ヨーロッパの剣士達が集った。あいさつや試合の進行は、すべてドイツ語、フランス語、英語の三ヶ国語が使われた。僕は「これだ！」とピーンとひらめいた。日本で国際試合が行なわれる時に、自分の語学がきつと役に立てるはずだ。何人もの人にマイクを回す必要もない。そして、いろいろな国の子供達にも剣道を教えられたら、うれしい。

また、僕は小さい子が大好きだ。保育園の先生になって、日本の子供達に英語やドイツ語を教えられたら、良いなあーと思うこともある。

僕は、ずっとインターナショナルスクールに通っている。学校では、自分の長所ははっきり主張し、強くアピールするべきだという教育を受けてきた。でも日本でそれをすると嫌われるらしい。良いところは回りの人がほめてくれることで、堂々と自まんしたりしたら変な奴だと思われるようだ。母からは、「自信を持つことはとても大切だけれど、人間にはある程度のけんきよさや遠りよが必要だ」と言われる。何だか、むずかしくて複雑な文化だけれど、剣道の先生達は剣道の練習と同じくらい日本の文化が好きだと言う。

大人になるまでに、もっと多くの言語を覚え、ちがう文化を理解できる人間になりたいと思う。自分の中にいろいろなチャンネルを持っていたら、必ずだれかの何かの役に立てるはずだ。

そして、それができる今の自分の環境にすなおに感謝できる、けんきよな日本人でもあり続けたいと思う。

児童虐待を無くすために僕の長所をいかす

(原文は英語)

S・S・リシャッド (12歳)

バングラデシュ人民共和国ダッカ市

ザ・アガ・カーン・スクール

僕は、国民一人当たりの一日の収入が1ドルにも満たない、バングラデシュという世界で最も貧しく腐敗した国の一つに住んでいます。この国では児童虐待が日常茶飯事に行われています。非常に多くの子ども達が誘拐され、人身売買され、肉体的に虐待され、時には殺されることすらあります。この国の南部に住む少数民族の子ども達は社会からひどく置き去りにされています。彼らは、社会の無関心ゆえに自分達の目標を果たせないことがしばしばあり、潜在能力までもが奪われています。だから僕は、自分の資質をいかして社会から子供への暴力を無くそうと取り組んでいます。

僕は両親と共にバングラデシュの地方を訪れ、自分が平和について知っていることを、貧しい家庭の子どもや虐待された子ども達が大半を占めているその地方の6つの学校で話しました。そして僕が住んでいる地域では、暴力や人身売買などで親兄弟を失った貧しい家事労働者の女性達に希望を与えました。平和やどうしたら児童虐待を防ぐことができるかということについて、彼女達に話をしました。

また、イラク戦争が防がれ、子ども達が少年兵として利用されなくなることを求めて、国際赤十字社と国連本部の高官達に手紙を出しました。ついにある日、僕は国連と国際赤十字社から僕の努力を称える2通のEメールをもらいました。それらのメールには、僕が訴えたことに対するポジティブな回答と、平和問題担当の国連事務次長にも僕の手紙を手渡したという内容が書かれていました。

僕はイラクやアフガニスタンの子ども達のことを父に話しました。そして、父からの援助金と自分のポケットマネーを合わせて、ドライフードと水のペットボトル、ロウソク、カードを56セット買い、その全部を箱詰めにして、イラクやアフガニスタンの病院や学校の56名の子ども達に送りました。僕はカードで平和のメッセージを伝え、一緒に平和のために力を合わせようと呼びかけました。しばらくして、僕は自分の地域に住む16名の貧しい子ども達と共に小さなクラブをつくり、「子ども達の平和クラブ」と名付けました。そこで貧しくて学校に行っていない子ども達と平和の話をしました。僕は彼らに、子どもへの暴力を無くすことがとても大事であると話しました。彼らはみな貧しく平和の問題についても知らないため、僕のどんな話も初めて聴く内容だったようで、その新鮮な知識を得て社会から児童虐待を無くすために力を合わせようと思ってくれた様子でした。

しばらくして、彼らは更に36名の子ども達をクラブに連れてきてくれました。今では、僕は106

人の恵まれない子ども達を相手に話をするまでになりました。彼らも僕にいろいろなことを教えてくれます。僕が暴力を無くすことを目的に開いた地域集会の様子は、国のメディアも取り上げてくれました。翌週僕は（これは容易なことではありませんでしたが、自分の持てるすべての交渉力を駆使して）地元選出の国会議員達や警視庁長官に会い、警察官による子どもへの暴力を終わらせるよう訴えました。長官は早速対応するため、僕が提出したレポートを大臣に手渡すと約束してくれました。

若い物書きとして、僕は自分の文章力を発揮し、平和の問題や児童虐待を無くす必要性について「ナショナル・チルドレンズ・サプリメント」誌に寄稿し始めました。人々の子ども達に対する平和の意識を啓発するため、これまでに 56 の記事を書きました。それから 7 つの公立学校の校長達に会って校内での暴力の防止を訴え、校長達も合意してくれました。その間僕は、アフガニスタン・カブールの学校やイラク・バグダッドの病院の子ども達から 28 通の手紙を受け取りました。手紙には僕からのプレゼントへのお礼の言葉が書かれていました。

僕は、学校一の演説家としてスピーチコンテストを組織し、テーマを「子供への暴力を無くすために」としました。この時、特別に自分の考えを生徒達に話す機会が与えられました。僕には歌や絵などの芸術的才能も結構あります。そこで、非暴力と平和の創造をテーマに 59 枚のポスターを描きました。自宅のガレージではこれらのポスターの個展も開きました。後で、自分で作曲した平和の歌を歌いました。また、ロータリークラブの会合でも平和について話をしました。ロータリーは平和のために活動している国際組織です。僕は地元の部族集落を訪れました。そこでは、僕は彼らの言葉が話せなかったので、自分の描いたポスターを使って平和と非暴力のメッセージを伝えました。彼らはとても感激し、僕のために部族のダンスを披露してくれました。僕は、インターネット上に世界中の誰でも参加出来るチャットルーム「グローバル・ピース・チャット」を開設しました。毎日 62 名ぐらいの人達が新たに参加してくれています。また僕は、あるラジオ番組を通して、この国の数百万人の子ども達に向けて、社会から子どもへの暴力を無くそうと呼びかけました。

今、僕は鏡を見ながら、自分の国や世界のためにどれだけ自分が変わることが出来るかを見出そうとしています。自分がしてきたことに満足感もありますが、多くの人々、特に子ども達や世界の指導者達そして国際機関などがこの文章を読んで、社会から子ども達への暴力を無くそうという気持ちになれるのであれば最高に幸せです。

この愛しい地球が平和で満たされますように。

聴いてくれてありがとう

(原文は英語)

栗山 明 (22歳)

京都府

京都府立医科大学

「明、聴いてくれてありがとう。」友達がよく私にこう言います。私の長所は、おそらく人の話をよく聴くことです。周りの人々の話を聴くことによって、ほんの短い間だけでも彼らの負担を和らげ、彼らの助けになることが出来るのです。私は、年齢を重ねるにつれて、人の話を聴くことは自分の勉強や自分で選んだ職業において益々重要になっていることに気づきました。医学生として、患者達の症状や痛み、そして気持ちに耳を傾けることは、とても大切なことなのです。

私自身もこれまでの22年間、一人の患者でした。私は生まれてからずっとアトピー性皮膚炎に苦しめられてきました。ご存知のように、この病気に罹ると皮膚は赤くなり痒くてなりません。街中を歩いていると、私は、いつも周りの人々のまるで何か変なものでも見るような好奇の視線を感じます。顔を洗う時、自分の赤ら顔を見たくないの、出来るだけ鏡を見ないようにします。フィールドで友達が走っているのを見ると、彼らと同じように顔いっぱい汗を流してみたいとあこがれます。なぜ自分がこんな目に遭わなければならないのだろう？ 友達の中でなぜ自分だけが？ 私は幾度となく自問しました。しかし、周りの誰からも答えは得られませんでした。どうして、このような不治の病気で神様は自分を苦しめ続けるのだろうと、私は次第に自分の運命を恨めしく思うようになりました。

この非常に個人的な病気の経験を通して、私は患者達が味わわなければならない悲しみや孤独の深さに気がつきました。もちろん、どんな病気であれ患者達は治りたいと望んでいるのですが、彼らが本当に望んでいるのは悲しみや孤独から解放されることなのです。空っぽな同情の言葉を必要としているのでも望んでいるのでもありません。彼らが必要としているのは、誰かに自分達の気持ちを聴いてもらい、同じ気持ちになってもらうことだけなのです。私について言えば、同じ病気で苦しんでいる母の存在はとても心強いものでした。母は私の傍に座り、私の痒い腕の上に手を当てて、「お前にとって、この病気がどれ程辛いことか母さんには分かるわよ。だって、母さんも同じ病気で苦しんでいるのだから」と言ってくれます。母の共感私の皮膚を癒す鎮静効果がありました。母に静かに見守られ同じ気持ちになってもらうだけで、ほとんどの医師達の上辺だけの診察や人任せの検査、最新の「治療薬」が素早く書かれた処方箋よりも、よっぽど救われた気持ちになります。患者達は肉体的な症状の治療だけでなく、症状に対する自分達の感情的な反応に共感し理解してもらう必要があります。

医学は苦しむ患者達の肉体と精神の両方を治療することが求められる、人道的な職業です。しかし最近では、医師の大半が技術本位、あるいは技術志向に偏ってしまっています。私自身も自分の医学の勉強を通して、この問題を自覚しています。私はCT（コンピュータ断層撮影法）やMRI（磁気共鳴映像法）などの技術は習いましたが、患者達の精神的な苦痛を理解し和らげる技術は一度たりとも学んだことがありません。CTとMRIは脳の構造の内側を私達に見せることは出来ても、患者達が何を考えているかを明らかにすることは出来ません。

紀元前400年のヒポクラテスの宣誓(Hippocratic Oath：医師の倫理綱領)は「人の温もりや同情、理解は、外科医のメスや薬剤師の薬を凌ぐものである」と断言しています。しかし2004年の偽善的宣誓(Hypocritical Oath)はまるで正反対のようです。即ち、「外科医のメスや薬剤師の薬は、人の温もりや同情、理解を凌ぐものである」と。多くの医師達が後者の誓いを立ててきたように見えるのです。科学に全幅の信頼を置き、普通の人間的な感情の部分を無視しています。

医療技術の発達により、数十年前であれば私達には為す術もなかったような病気を発見し、治療することが出来るようになってきました。しかし、近代医学は万能ではありません。私達の生涯の健康を保証してくれるわけではないのです。人間はガンやエイズ、その他の慢性病に依然として苦しめられています。近代医学は完璧に治すことは出来ず、これらの病気の前では時として無力なのです。このようにあらゆる治療法が尽くされた時、唯一残っている効果的な治療法は真心を込めて「患者達の話に耳を傾け、理解する」ことだけなのです。この点では、医師達は十分に技術を兼ね備えているようには思えません。事実、これこそが問題の核心部分なのです。医師達が患者達の気持ちを扱う技術に乏しいのは、まさしく「技術装置」に頼ることが出来ないからなのです。彼らは技術に頼ることなく問題を解決する訓練を受けてこなかったのです。

人間誰も病気や痛み、やがては死を経験します。医療の現場は、この共通性を認識しなければなりません。ここ数年間、私は自分の「聴く」能力は自分の診断力を構成する大切な技能の一つであることに気づくようになりました。次第に、自分には苦しむ患者達の言葉に耳を傾け、彼らの気持ちを理解する能力があるということに自覚しつつあります。このことは私が治療法を考える上での自信を強めてくれています。何故ならば、私は患者達のニーズに真剣に耳を傾け、理解してきたからです。

最後に、マザー・テレサが語った言葉を引用したいと思います。「家に病気や孤独な人がいるのならば、傍に居てあげなさい。ただ手を握ったり、微笑みかけたりしてあげるだけかも知れませんが、それこそが最も立派で美しい行為なのです。」

聴いていただき有難うございました。

暴力の文化の中で非暴力に生きる

(原文は英語)

バーワード・ジョンソン (25 歳)

リベリア共和国モンロビア市

リベリア大学

私は過去 25 年間、つまり生まれてこの方、暴力が当たり前の国に暮らしてきました。子どもや私と同じ世代の若者たちは暴力の文化の中で育ちました。暴力の種が撒かれたのは、私が生まれた直後のことです。

生後 1 ヶ月の頃暴動が勃発し、その連鎖は国全体を長期間暴力の渦に巻き込みました。それから 1 年近く経った 1980 年 4 月 12 日、暴動は新たな段階に突入しました。血生臭いクーデターが起こり、当時のウィリアム・R・トルバート大統領が暗殺される事態へと発展しました。暴動と同様に、クーデターは暴力の文化を助長します。国中が再び混乱におちいりました。無差別殺人、レイプ、略奪がいたるところで起こりました。そのクーデターの 5 年後、別のクーデターが起こりました。この時のクーデターは失敗に終わりましたが、前回よりも更に暴力的で凄惨なものでした。この国は今だかつてない殺戮と破壊を経験しました。しかし、これが暴力の終わりではありませんでした。その後、更にひどい状況が待ち構えていました。

そして、1989 年 12 月 24 日、残虐な内戦が勃発しました。この内戦は 14 年続き、この国にとって未曾有の暴力状態に子どもや若者達をさらしました。若者達は、この近代人類史上類稀な残虐行為の犠牲者になり、また加害者にもなりました。1990 年代始めには、リベリア社会全体が暴力に侵されてしまいました。実際、内戦は暴力の文化を助長し、ついには暴力が人々の生活の一部になっていました。

私の周りには暴力が溢れていましたが、自分は何とか非暴力的生活を送ることができました。私は幼い頃から非暴力の生き方を実践し、ずっとその価値観を貫いてきました。何故ならば、非暴力と平和の文化を育むことによるのみ、世界はより暮らしやすい場所となると信じているからです。私は非暴力の生き方をしながら、他の人々には愛と尊敬の気持ちで接しています。また、他人の意見に対しても寛容です。

更に、私はいかなる形の暴力も拒否しています。私は、そのことで友達に嘲られようとも、常に誰かとの暴力的な対立に陥りそうな状況を避けるよう努めています。例えば、内戦中、私は戦うための武器を手にしませんでした。武器は手にせず学校に行くことを決意していた私達少数者は、暴動が起こるといつも標的になりました。私達は銃を持った同級生達から脅されたり、殴られたりしました。

私達を暴力に駆り立てようとする肉体への圧力に加えて、経済的な圧力もありました。銃のみが容易に生き延びるための手段だったのです。銃を持ったものだけが経済的にも力を持ち、持たない者は物乞いになるしか道はなかったのです。

多くの若者達に銃を持たせてしまった心理的経済的な圧力にも関わらず、私は非暴力の生活を送ろうと断固とした態度を取り続けました。私は常に非暴力と平和の重要性を人々に伝えようと努力しています。そして人々に対して、暴力を拒否し、一人一人の生命と人間の尊厳を守るよう訴えています。私の平和と非暴力の運動を通して、多くの若者達が平和と非暴力の文化によってのみ、自分達の国が自己破滅と後退の道から蘇るのだということに気がつき始めています。

現在私は、国の中から武器を一掃しようという運動に加わっています。元兵士達に、紛争解決のためにやって来た国連平和維持軍に武器を明け渡すよう、働きかけています。この運動は非常によい展開を見せており、元兵士達が一人残らず武装解除をするまで続けるつもりです。

私は、武装解除後の平和を維持するため、「暴力に反対する若者達」という若者グループを組織しようと考えています。このグループは平和と非暴力の文化を推進し、若い元兵士達の社会復帰の手助けをします。また、元兵士を含む若者達が一堂に会し、戦争と暴力の文化を平和と非暴力の文化へと転換させるための話し合いの場を設けます。

私は戦争だけでなく、地球上に蔓延するありとあらゆる暴力を拒否します。私が全く理解できないのは、何故この英知の時代にあって、人々は未だ暴力によって違いの溝を埋めることが出来るのかということです。私は、どんな問題にも暴力によらない平和的な解決法が必ずあると信じています。私達が平和と非暴力の文化を築こうと努力することで、きっと世界はもっと素晴らしい場所になることでしょう。もし直ちにこの平和と非暴力の文化の創造に着手しなければ、私達は人類がこれまでに成し遂げてきたすべての成果や進歩を無意味なものにし、次世代に荒涼とした未来を残してしまうことなるでしょう。

世界中が平和で満たされますように

私の笑顔はみんなの笑顔

(原文)

戸毛 歩 (13歳)

東京都

中央区立日本橋中学校

「とげの笑顔に何度も励まされたよ。」これは、私の大親友が小学校の卒業式に言ってくれた言葉です。私は、こう言ってもらって、本当に嬉しかったです。それは、笑顔が大好きだからなのです。笑顔って素敵じゃないですか？ たとえ、言葉が通じなくても、笑顔一つでみんなが微笑むことができます。

私は、ポスターや写真集で見たアフガニスタンの子供たちに、驚きを覚えました。それまで、アフガニスタンのことを報道しているのを見たり、総合学習で調べたりして、「私がもし、アフガニスタンにいたら絶対に笑えない！」と何度も思っていました。けれど実際には、アフガニスタンの子供たちは、太陽のような笑顔で笑っていました。アフガニスタンの状況をあまり知らなかった頃、なんで笑顔でいられるのか、とても不思議でしたが、今はそう思っていた自分を恥ずかしく思います。アフガニスタンがどういう状況であろうと、そこにいる人たちが笑っている、というのは人間として当たり前のことだったのです。笑うことがいけない、笑うことの出来ない人なんてこの世界にはいないはずです。だから私は、国がどういう状況であっても、素敵な笑顔を輝かせているアフガニスタンの人たちを尊敬しています。

ロバート・キャパという報道カメラマンがいます。彼は戦地の生々しい様子を写真に写し、伝えました。また、彼は人の笑顔も愛したと言われています。教科書には、一人の男の子の写真が載っていました。その子は、満面の笑みで写っていました。私はその写真を見て、「すっごくうれしいことがあったんだな！」と心が弾みました。私はここで、「誰かが笑顔でいると、その周りの人も笑顔になれる！！」という法則を見つけたのです。そして、「自分が笑顔でいたら、みんな笑顔になれるんじゃないかな。」と思いました。そこから私の長所、「笑顔大好き！！」は始まったのです。

私は、難民のことにとても興味があります。だから、ユニセフ募金などには積極的に参加しています。「この100円で何人もの命が救われ、何人もの人の顔に笑顔が生まれるんだな。」と思い、100円を入れるのは惜しいけれど我慢して募金します。核兵器、戦争、内紛、世界には数え切れないほどの問題があります。今、この瞬間にもたくさんの方が傷つき悲しんでいます。そんな、何も罪を犯していない人からたとえちょっとでも笑顔を奪う人を私は許しません。そういうことをする人に笑顔の素晴らしさを知ってもらいたいです。どんな人でも、自分が泣いているとき、誰かに笑顔で「大丈夫だ

よ。」と慰めてもらったことがあるはずです。そのとき、たくさんの安心と心の開放感を感じたと思います。それほど笑顔は大切なのです。そのことをぜひ、みんなにわかってほしいです。

私の将来の夢は「全世界の人が笑顔でいることです」です。いつか笑顔であふれている地球になることを夢見ています。イラクで日本人が殺された、などというニュースが飛び込んできたりしている今、それは決してたやすいことではないのはわかっています。でも、だからこそ、絶対に実現させたいです。そのために、小さな事だけれど私自身がいつも笑顔でいて、その周りにいる人から少しずつ「笑顔になろう！」運動を進めていきたいです。

私は、「とげの笑顔に何度も励まされたよ。」と、言ってくれた友達にとっても感謝しています。彼女が私の長所を見つけてくれたのです。そして、笑顔からたくさんのことを学び、自分に一つ目標ができました。「笑顔になろう！」そう、そのその笑顔が素敵！！……これが私の長所です。

自分の長所をいかす

(原文は英語)

マウ・アカ・マウ・マウ・アウン・チョー・テ (13歳)

ミャンマー連邦ヤンゴン市

ダゴン中学校

人が生まれて、生きて、死ぬことは簡単なことです。だから人間は、生まれてから死ぬまでの一生を有意義に過ごさなければなりません。

私は自分の人生をできるだけ有意義に過ごしたいと思っています。ですから私は、自分がすることが人々の役に立つだろうかと考えてから行動しています。人の価値は、その人が自分の目標に向かって、どれくらい努力するかによって決まります。私はきちんと授業を受けて、余暇の時間は無駄な遊びに浪費するのではなく、色々な知識を得るために、本を読んで過ごしています。私は10代なので、母の家事の手伝いもします。私が手伝うことを母はとても喜んでくれます。私は若い人やお年よりなど、誰とでも話をします。機会があればいつでも、お年よりを助けます。

学校では環境問題や環境保護についての授業があります。この授業で環境に対する理解がとても深まりました。

私は環境に対する啓蒙を世界的に行なった、レイチェル・カーソン博士をととても尊敬しています。彼女は有名な著書、「沈黙の春」や「われらをめぐる海」で賞を受けました。その著書の中で彼女は、何千もの動物や鳥が殺虫剤のDDTによって死に追いやられたことを書いています。彼女は人間が環境の崩壊によって危機に瀕している現実を浮き彫りにしました。これが、彼女が環境保護運動の母といわれる理由です。

私達の基本的な生活物質、食料、家、衣類などを得るためには、お金を稼がなければならないことは、疑いの無い事実です。でも、私達の環境を保護して、世界を住みやすいところにするのも、同じくらい重要なことです。

私は記憶力には自信がありますし、何でも一生懸命、忍耐強くやってきました。

これらの長所を生かして、私は詩を習ったり、憶えたり、暗誦したりしています。それから忍耐力をつけるために、ジグソーパズルをやっています。全部のピースがぴったり合うまで、ピースを一つ一つ、はめ込むのです。私の祖母はいつも、とてもためになる助言をしてくれます。彼女は、一旦始めた仕事は必ずやり遂げなさいと、私達に教えてくれます。ですから、私は自分でやり始めたことは、何でも一生懸命やります。

これらの自分の長所を充分に生かして行けば、世界をより良いものにしたいという私の夢を叶える、

大きな助けになると思います。

私は一生懸命勉強をして、高校を卒業したら、環境の勉強をしたいと思っています。そして、この世界を地上の楽園にしたいのです。

私の一番の願望

(原文は英語)

カイン・タラフィ・ディン (14歳)

ミャンマー連邦ヤンゴン市

ボタタウン町立第五中学校

世界のどこにも、願望を持たない人などいません。赤ちゃんでさえもお腹が空いた時は、お母さんのおっぱいをただ吸いたいという自分の願望を持ちます。願望は人によって違います。ある人にとってはシンプルであり、別の人にとってはとても個人的です。願望には自分だけの利益になるものもあれば、社会にとって有益なものもあります。

私は、幼い頃から、両親の期待に最大限に報いたいという非常に強い願望を抱いてきました。私の村の人達は私の両親に対して心からの敬意を表しています。両親は決して豊かではありませんが、助けを必要とする人にはいつでも手を差し伸べてきました。村人の中には、学校入学の時期になると、自分の子どもに教育を受けさせるためのお金の援助を期待して、私の両親に頼ってくる人もいます。私の村に暮らす大多数の人々は、子どもに教育を受けさせるための貯金が出る程豊かではありません。けれども、私の両親がそうであるように、自分の子ども達に教育を受けさせたいと望んでいます。

ですから、両親はいつも、大きくなったら教師になって子ども達に教えてあげて欲しい、と私に言います。私自身、村の小さな子ども達に読み書きを教え、またきちんとした礼儀も教えたいという強い願望を持っています。長期のお休みの間、私が村に帰るといつも村の子ども達が集まってくるので、私はいろいろと教えてあげます。普段から私はお金を貯めて、子ども達に物語や学習用の本をプレゼントしてあげます。時には街で私が体験した事を、かつて父が建てた村のかやぶき屋根の待合所で、子ども達に話してあげます。そうすると、子ども達の喜ぶ声が辺り一面に広がります。私の話を聴くのが好きな子ども達もいれば、詩の朗読を聴くのが好きな子ども達もいます。別の子供達は読み書きを習いたがります。

このように、私はほとんどの休日を村の子ども達に教えて過ごします。そのため、私達のきずなはますます深まっています。どんな社会でも人々がもっと高い教育を受け、礼儀正しければもっと平和になり、発展すると私は信じています。良い心を持つ人々だけが世界を平和に変えていくことが出来るので、私は村人達の良い資質を伸ばしていこうと励んでいます。私は、自分の長所をもっともっと生かし、人々がこの地球村の良き村人になれるよう教え導いてあげよう、と心に決めました。村人達には世界の平和の担い手になってもらいたいのです。このような自分の考え方は、私が幼い頃から将来に目を向けてくれていた両親によって培われたものです。

私は、良き娘であるだけでなく、善良で忠実な市民でもありたいので、常に自分自身を磨き高め上げようと精一杯努力しています。良き教師になるためには、私は良き学び手にならなければなりません。また良き従者でなければ良き指導者には成り得ません。そして良き指導者だけが、明るい未来を手に入れられるよう人々を導くことが出来るのです。貧困の中で暮らしたいと思う人など誰もいません。貧困を無くすためにも、私達は学ばなければなりません。私が幼い頃より、賢明な両親は私が尊敬に値する良い資質を身につけられるよう、しつけてくれました。今、私の一番の願望は、村の人達の考えや生き方を高めることで、彼らに輝きをもたらすことです。

自分の長所をいかす

(原文は英語)

グネシュ・ディヴヤ (14歳)

モーリシャス共和国・マレ ダルベール市
クイーン・エリザベス中学校

人にはそれぞれ自分の長所があります。私の長所といえば、知識を求めること、親切心、人助けをしたい気持ち、お年寄りを敬う気持ち、正直さ、楽観主義、そして神を信じる心です。

知識への関心が一番好きな長所です。知識は人にとって非常に大切な要素だと思います。学校教育は知識の宝庫です。教育を通して自分の知らないことが明らかになります。私は自分の知識を豊かにするため、良い本をたくさん読みます。良い本を読まなければ、本を読めないのと同じです。

私の将来の夢は、医者になって、社会のあらゆる人々を助けるため、診療所を建てることです。

私の親切心や人助けをしたい気持ちは、その次に好きな自分の長所です。私は友達にいつも優しく接して、自分の親しみやすい性格を育てています。母はいつも私が世界一の娘だと言ってくれます。母が私のことを誇りに思ってくれているのを感じます。

親切心や常に人助けをしたいという気持ちから、私は学校の慈善クラブに入っています。友達と一緒に、虐待された児童が保護されている、「SOS村」にしばしば出かけます。「SOS村」にはたくさんのお家があり、1人の女性につき7名ほどの子どもの世話をしています。私達は世話をしている女性達を手助けし、子ども達と一緒に遊んだりピクニックをしたりして、彼らに笑顔が戻るよう努力しています。ある時一人の少女が目には涙を浮かべながら私に抱きついて、「お姉ちゃん、今日一日、本当のお姉ちゃんみたいだった。絶対、また来てね。」と耳元でささやきました。

私は自分の村にある聴覚障害者の施設でもボランティアをしています。いつも耳の不自由な人達を励ましています。ある日、パーティーで施設の数人の女の子達がダンスを踊り、一人の女の子が時々手話で女の子達に指導をしていました。とても素晴らしいダンスで、皆大きな拍手を送りました。そんな女の子達の姿に私はとても嬉しくなり、思わず涙ぐみました。

私の親切心はお年寄りを敬う気持ちにもつながっています。お年寄りには私のような若者よりもずっと人生の経験を積んでいます。お年寄りからは貴重なアドバイスがもらえますし、私達もお年寄りを敬わなければなりません。祖母はよく、私達家族のことを愛しているし、自分は大切に敬われていて幸せだと、話していました。

私は、お年寄りがバスの中で立っているのを見かけると、いつも席を譲ります。その人から笑顔で「ありがとう」と言葉を掛けられるだけで、一日中元気に過ごすことができます。

正直さは大切な長所です。私がいつも正直なので、友達も私のことを信頼してくれています。私は両親に対しても誠実です。決して両親にうそをついたりしません。正直さは信頼関係を生みます。友達であれ恋愛であれ、どんな人間関係も正直さと信頼関係が基本です。

楽観主義は私のもう一つの長所です。人生は常にポジティブにとらえなければいけないと思います。そうでなければ、ストレスを抱えてしまいます。現代社会の大きな健康問題であるストレスは、うつ病や他の病気の原因となります。自分の抱える問題が決して解決出来ないと思った時に、ストレスは生じます。誰でも自分が一番苦勞を背負っていると思いがちですが、それは正しくありません。私は楽観主義者なので、いつも自分で問題を解決する方法を探ろうとします。そのため、ストレスを抱えることはほとんどありません。

神を信じる心は、私の大好きな長所です。私は、神を信じる心はより大きな心の平和をもたらしてくれると思います。神は唯一の存在ですが、異なった姿や形でとらえられています。そのためいろいろな宗教が生まれました。異なる宗教同士が対立するのは馬鹿げたことだと思います。どうしてけんかをしなければならぬのでしょうか？ 私達は同じ人間です。違いと言えば、神を異なったイメージでとらえているだけなのです。シバ神であれ、キリストであれ、アラーであれ、同じ神様です。

私は神を強く信じています。私は、ヒンズー教徒なので、毎日シバ神への祈りを捧げています。でも毎週土曜日に化学の教室からの帰り道には、いつも途中にあるキリスト教会に立ち寄り、キリストへの祈りを捧げていました。

神を信じる心が強まるきっかけとなった出来事があります。3ヶ月前にある病院を訪ねた時、白血病の男の子と友達になりました。その子は骨髄移植の手術を受けなければ命が無くなるという状況にありました。彼は自分も長く生きて、友達のように幸せになりたいと言いました。私は、男の子が一日も早く骨髄移植の手術を受けられるよう祈りました。数日後、彼の骨髄移植手術が実現し、今、毎日元気です。

ある時、一人の友人が、「もしあなたが神様だったら、世界をどんなふうに変えていたと思う？」と私に聞きました。私は「きっと世界に平和をもたらしていたはずよ」と静かに答えました。

私は、だれでも人助けをするために自分の長所をいかすべきだと思います。私達は自己中心的であってはいけないし、ポジティブに物事を考えなければならないと思います。

前進

(原文は英語)

サラ・ローズ・フーカー (15歳)

モザンビーク共和国マプト市

マプト・インターナショナル・スクール

私は、私のまわりに暖かい羽根蒲団のように広がる、太陽が一杯に輝く空を見つめています。柔らかい、海からのそよ風が私のショールをかすめて、本のページをひらひらと揺らすので、私は水平線を見渡します。私の長所は何かしら？ はっきりこれと指摘するのは、とても難しいのだけれど、なにか永遠に自分と共にあるもの…… 私の長所は、私の行動や、信念や、価値観を形成するもの。私の長所は、私が生まれ持った道具、一生を私と共にする唯一のもの。私の長所は肉体的なものではないのだけれど、いさかいを治めるげんこつくらい効き目のあるもの。でも、げんこつと、これらの不思議な長所は、口が曲がるほどまずい薬と、蜂蜜ほども違う……

私の長所の一つは、独立心が強いということです。私にとって、自分の二本の足で立つということは、とても大事なことです。私にとって、独立とは自由です。独立心は私に開拓するチャンスを与えてくれます。自分をしっかり持って、人の意見に屈せずに自分の考えや意見を主張するチャンスを与えてくれます。

もう一つの長所は、私には決断力があることです。これは私にとってとても大切で、肌身はなさず、しっかり持っています。皆が生存競争に明け暮れている現代、これはかけがえのない財産で、人生の色々な場面で素早くスタートを切らせてくれるものです。決断力は、決して諦めてはいけないこと、そして突き進み、決して後戻りしないことを教えてくれます。敗北の一步手前で、それでも私に前進する力をくれるのは決断力です。

ユーモアは私の秘密の武器です。ユーモアは気まずい場面を笑い飛ばしてくれます。本当は惨めに打ちのめされていても、傷ついたように見えなくさせてくれます。ユーモアは過酷な現実でも、相手を傷つけずにそれを伝え、同時に皆に過ちを認識させます。ユーモアは友人同士のつながりを強め、二人の見知らぬ人の間にあっという間に新しいつながりを作り出します。しかし、一番大切なのは、ユーモアは自分自身を、違った角度から見させてくれることです。人と一緒に自分のことを笑うことで、積極的に自分の間違いを受け入れさせられるのです。

忍耐力も私の長所の一つです。忍耐力は決断力と一体のもので、私はこれを、自分が暴走してしまいそうな時に鎮めるために使います。忍耐力のお陰で、同じ質問にも何度でも答え続けられます。でも、一番重要なのは、忍耐力は絶望しそうになったり、諦めかけた時でも、人を助けることを続け

させてくれるということです。

私の他の色々な長所が私の夢に刺激を与えるのです。そして、私の前進する力となります。私の長所とは私にとって、チョコレートでもあり、ガソリンでもある・・・つまり、私の中にあらゆる力を湧き上がらせてくれるものです。私の長所が私の夢を構築するのです。私を大きな椅子に座らせて、色々な想像をさせてくれます。そして、その夢は、私が会うすべての人、私が読むすべての本に刺激されて、新しいレベルへと上昇して行きます。

私の長所のお陰で、私は人生を歩み始めることができます。見渡す限り、丘や、山や、谷があって、私が横切るのを待っています。うっとりするような風景や、泳ぎ下らなければならない川もあります。チャンスや冒険が待ち受けています。でもたとえ、最強の長所があったとしても、常に行く手には溝もあります。でこぼこの道を歩くには、自分を信じなければなりません。自分の長所を更に伸ばして、自分の価値観や倫理観や人格を人に伝えなければなりません。私の長所を最大限生かすためには、私は決して人から学ぶ姿勢を忘れてはなりません。私たち人間はこの惑星で一番大きな情報の源泉なのです。そして、もっと重要なことは、人のことを思いやり、人から学ぶことで、人々とゆるぎない絆を築くことができるということです。私の周りの人々と接するとき、私はいつも彼らに私の一面を見せますが、その度に私は、その人たちの長所と私の長所が混じり合っ、よりよいものになって行くのを感じます。私の長所を広げること、例えば嘘をつかずに真実を言う、誰もやりたがらない事を進んでやるといった、そんな些細なことでも、私は周囲の人々に手本を示しています。

人の長所が、その人の周囲をどれほど変えることができるか、私は決して過小評価しません。平和な世界を想像するときにはいつも私は、長所を使ったら解決できたはずなのに、短所を使って駄目にしてしまったシナリオを消去しなければなりません。長所を使えば、戦争や世界的紛争などの問題の必要はもはやなくなり、もっと平和的に交渉することが出来るようになるでしょう。必要な薬はただ、2、3分の忍耐と思いやりだけです。この薬はテロリズムや戦争に対しては完璧な解毒剤です。毎日世界中で起こる不幸な事件も個人、個人の努力で解決できるものがあると私は考えています。私達のささやかな長所を見せることで、苦しんでいる人を幸せにし、感動させることができるのです。

人間の長所というものは、手紙をどんどん渡してゆくように、ずっとつながってゆくものだと思います。私が私の長所を使うと、誰かが感動して、他の人に同じようなことをする。そうして、つながってゆくのです。地球上には何十億もの人間がいるのですから、ものすごい数のつながりができることとなります。こんなたくさんのつながりを動かすなんて、不可能に思えるでしょうが、それにはお金も、食べ物も、おもちゃもいらぬのです。唯一必要なのは、自分の内面に働きかけて、自分の長所を引っ張り出すことだけなのです。

さあ、私のハイキングシューズを出して、歩き始める時間です。大きく浮かぶ私の未来、私は私の長所を使って、どんな障害も突破できると信じています。

農業を通じた国際貢献への道

(原文)

宮永 幸則 (17歳)

兵庫県

兵庫県立播磨農業高等学校

これまで人類は、生きるために食糧を生産することによって安定した生活基盤を築き、長い世代に渡って子孫を残していくことができました。しかし、ここ近年は世界の各地で食糧不足の問題が起っており、今この瞬間も数えきれない多くの人たちが餓死しているというのが現状です。これからの未来、わたしたち人類が安心して生活していくためには、食糧の確保が一番大切なことです。

私は中学卒業後、播磨農業高校に進学しました。これからの時代、世界の食糧確保の問題は重要であり、先見的にも農業はとても重要な役割を果たす産業だと考えたからです。

私は幼い頃から汗をかくことが好きで、大変な作業も難なくこなすという長所がありました。屋内での座学よりも外に出て行う実習のような体全体で学ぶ学習のほうが好きでしたので、農業実習が主体の農業高校は私にとっては最高の学びのスペースでした。入学後は無農薬の有機農法に興味を持ち、学校全体で取り組んでいるアイガモ農法について懸命に勉強しました。

アイガモ農法とは、農薬を一切使用せずにアイガモの働きと人間の汗だけで米づくりを行う、完全無農薬の有機農法です。今まで私は農薬を使用した米作りしか知らなかったので、アイガモ農法に強い関心を持ち、学校の実習だけでなく、昨年に神戸で開催された「全国アイガモフォーラム」に参加したり、夏休みを利用して九州のアイガモ農家へ一週間の間、農家研修へ出かけたりしました。一週間という限られた時間で、いかに多くのことを学び取れるかは不安でしたが、自分の長所である重労働にも耐えられる強い根性で一生懸命に実習をし、毎日生きた教材をもとに学習することによって充実した時間を送ることができました。それだけでなく、農家に課せられた厳しい現状も目の当たりにし、人類が生きていくための食糧を生産するということが、とても大変な仕事だということを痛感することのできる一週間でした。

なによりも一番印象にのこったのが、アイガモ農法の多面的な生産機能でした。まず、水田では稲が実ります。また、雑草防除や害虫駆除の役割を果たすアイガモは家畜として食用できます。水田の中にはアイガモのフンをエサにしてドジョウやコイが育ち、水産物として食用することができます。つまり、少ないスペースで、稲作と畜産と水産の3つが同時に行えるのです。これにより、少ない労力や費用でたくさんの食糧を生産することができるというわけです。アイガモ農法が全世界に広まれば、世界の食糧不足の問題を解決できるのではないのでしょうか。

私の将来の夢は、青年海外協力隊の隊員として、世界各国に農業の技術を教えに行き、同時にその国でアイガモ農法の普及活動を行うことです。言語も文化も異なる国で自分の想いや意志をつらぬくことは決して簡単なことではないでしょう。しかし、誰かがやらなければ、世界の食糧問題はいつまでたっても解決することができません。そこで、自分が先頭に立って開発途上国などに農業技術の援助をし、国際貢献していきたいのです。

まず自分の夢を叶える第一歩として、高校卒業後は大学の農学部で農業に関する深い知識を身に付け、世界じゅうの全ての人々が平和と生存のために安心した生活のできる国際社会を築くための一翼を担いたいと思います。

私の長所と夢

(原文)

横山 亮 (18歳)

埼玉県

早稲田大学高等学院

私の長所は何だろうか。私はいたって平凡な高校生であるが、しいて挙げるなら、ものに動じない性格と順応力ではないかと思う。それは海外、とりわけ南アフリカで経験し学んだことによって培われた。アフリカ人は日本人と違い、非常にゆったりとしている。物事を楽観的にとらえ、決してあせったりしない。しかし、その暮らしは恐ろしく貧しいものから、御殿に住む大金持ちまでさまざま、日本で言う「普通」という基準はないのである。当初は驚きの連続であったが、様々な人々が色々な地域でしっかり生きている様子を目の当たりにした。そこから「何でもあり」という境地になり、ちょっとやそつとでは、動揺したり、パニックになったりすることもなく対応できるようになった。また「こだわり」を持たず、自然体で何事にも順応できるようになったのだ。そして、日本人はせっかちだと改めて感じた。日本に帰国した今では昔に比べ、ものに動じない性格になったのではないかと思う。また小学校から続けているサッカーにより順応性がうまれた。

今、イラク問題により我々日本人は少しずつではあるが、イラクの人々の生活状況などはニュースなどを通して認識していると思うが、アフリカについてはどうだろうか。一般的な見解として貧しいなどと言われているが果してどの程度？などという具体的なことを聞かれたら答えられるだろうか。ただお金を寄付したからといって彼らの生活が改善されるなどと考えていないだろうか。私も日本にいたときはそのようなことについてほとんど無知であったが、3年間に渡って実際に生活したことにより、アフリカの現状を少しは認識できたように思う。言葉も違えば人々の考え方も生活習慣も違う場所で実際に生活し経験したことで私のものに動じない性格と順応力が生まれ、それこそが私の長所せあり、財産であると思う。

将来はこれらの長所を生かし、世界の国々とくにアフリカと日本のかけ橋となるような仕事をして社会に貢献したいと考えている。まず、今のアフリカの現状をより詳しく日本の人々に伝えることが大切だと思う。様々なことに幅広い対応力で応じ、アフリカ人の願い、考えなどを日本の人々に知らせたい。私が南アフリカ共和国での生活を経て一番に感じたことは彼らに必要なものはお金などではなく教育だということだ。確かにお金も有り難いとは思いますが、今教育を受けることのできない子供・若者が大勢いることを伝えたい。現地点ではお金よりも教育が大事なのだ。字さえも書けない人も多く、その結果仕事に就くことができないのだ。そのため、経済的不安定で環境が悪く、それがエイズ

の増加や平均寿命が極めて低いことにつながっている。そのようなことを日本の人々に対して、ものに動じず、粘り強く訴え、解決の糸口を見つけていきたい。そしてゆくゆくは日本人に対してだけではなく欧米などにも伝えることができれば素晴らしいと思う。ものに動じない性格を生かして言葉の問題、文化の違いなどを気にせずには本質に立ち向かっていきたい。また幅広い対応力を生かして、その場その場の問題を解決し、社会に役立てていきたいと願っている。

今や、日本一国だけの繁栄を願う時代ではない。世界の“グローバル化が進み、地球全体の自然環境、経済、政治を考えなければ、未来はないのだ。その中でとりわけ遅れていると思われるアフリカの発展に協力できることが私の夢である。

討論会、私の長所を生かす世界

(原文は英語)

ムハマッド・ドニー・エリヤスタ (19歳)

インドネシア共和国デポック市

インドネシア大学

このエッセイを書き終わる頃までには、私は、世界学生討論選手権大会へのインドネシア高校の部代表を選出するための、全国的な機関である、インドネシア学生討論選手権大会の、主審補佐として働くことになっています。これは私が四年前に参加した選手権大会です。その時以来、私にとって討論会とは、インドネシアに民主主義を打ち立て、若者の間に人の意見を尊重する習慣をつけさせ、より偏見や差別の無い社会を作り出し、平和な世界を作るためのプロセスに貢献する場となっています。討論会は私の長所を最も生かすことのできる分野であり、同時に討論会は私にとって学びの場となっています。

私の長所は何かと聞かれた時、率直に言えば、勤勉さということになるかもしれません。私は、人が受ける結果と言うものはその人がつぎ込んだ努力に比例すると強く信じています。反面、私は楽観的な人間だともいえます。私は、未来はより良いものになると常に信じています。なぜなら、外的要因は、全くと言ってよいほど、私たちが経験する不幸な事態を作り出す原因にはならないと考えるからです。現在私はインドネシアの一流大学で勉強していますが、そこに入学する前に、三つの大学から入学を拒否されました。私が全国生物学オリンピックの最終選考生徒になった時も、その前に物理学オリンピックで何回も落選したのです。そして、世界学生討論選手権大会のインドネシアで最初の代表の一人に選ばれる前にも、私は全国選考の段階で二回落選したのです。

討論会は私にたくさんの有益なものをもたらしました。私は討論者として、競技討論に主に関わってきた結果、これが単なる議論や演説競争以上のものであることが分かってきました。討論を支える哲学は、一つの話には、常に二つ以上の側面があるということです。インドネシアでは、人と違う意見を持つということはタブーとされてきました。わが国は32年間新体制政権によって支配されてきました。その間、報道は規制され、反体制派は粛清され、言論の自由は弾圧されてきました。1998年の改革以後は混乱と暴動の時期が続きました。民族主義団体には、無政府主義と闘争がはびこりました。人々は余りにも長い間規制されていたため、暴力を含む色々な方向にエネルギーを発散して満足感を得ようとしたのです。

このような時に、競技討論会がインドネシアに導入されたのです。討論会では一つのチームがある動議を支持するか、それに反対するかの立場を与えられます。動議は「我々は民主主義を押し付ける

べきだ」から「我々は同性愛者の聖職者を認めるべきだ」まで、多岐にわたります。自分の主張は、ただ正しいと言われたから正しい、相手の主張は、ただ間違えていると言われたから間違えていると言うことはできません。討論することによって、他人の意見を尊重するようになります。又、違いを認め合うこともできるようになります。これは、他のグループは、単に自分たちと違う主張だという理由だけで間違えていると言うのではなく、互いの意見の不一致を、対話と推論で埋めることができるようになるからです。私は他人の意見を尊重する、意見の不一致を推論で解決する、偏見を無くす等のことを、討論を通じて学びましたが、これらの事は皆、インドネシアで必要とされているものだと考えています。

私は、自分の長所を通して地域社会に貢献することが、最も自分の長所を生かす方法だと思っています。インドネシアで討論の普及に一生懸命努めることにより、わが国の若者の間に討論の効果を広めることができると確信しています。大学の討論サークルの主任幹事として、私は定例討論会を開催し、参加者に色々な議題を話し合ってもらい、討論の実践もしてもらっています。討論サークルの友人と共に、私は大学生や高校生を対象に、討論のセミナー、訓練会や競技会を開催しています。討論は若者の間に徐々に広まりつつあり、国内で盛んになってきたと感じています。私はさらに多くの人々が討論の効果を知って、インドネシアがより良い国になってゆくものと信じています。

私はこの活動が自分の長所を生かす最も良い方法であると信じるとともに、これを通じて、自分自身をより向上させることができると信じています。

天啓：明るい響きを伝える

(原文は英語)

アンナ・マズレック (20歳)

スウェーデン王国バルビー市

ストックホルム大学

世界は悲劇に満ち溢れています。しかし、最大の悲劇は人々の潜在能力がいかされていないことです。数え切れない程多くの人々が自分の夢を諦め、自分の才能を無視し、自分の素晴らしさを否定しています。そんな無駄を見ると私の心は痛みます。何故ならば、私達は皆、それぞれの内に美しく秀でた何かを持っていると信じるからです。そう、一人残らずです。そして自分達に与えられた内なる長所をいかすことは、自分自身のみならず世界に対する私達人間の責務である信じています。悲しいことに私達の多くは、おそらく失敗への恐れからか、長所をいかし切っていません。

しかし逆に、恐怖心は自らを後押しして前進させる動機とも成り得ます。私が最も恐れるのは、ある朝目覚めて、自分に与えられた能力を発揮することなくもう人生が終わってしまったと気づくことです。周りの人々が自分の潜在能力を無駄にしてしまっているのをいやという程見てきたので、私は「羽を広げるのを恐れて、一度も空へ飛び立ったことのない迷える小鳥にはなりたくない」という強い決意を持つようになりました。

私は根っからの理想主義者ですが、すべての目標が達成できるわけではないという現実も分かっているつもりです。しかし、すべてのことが可能ではないことを知りながらも、私は依然、不可能なことは何もないと信じ続けています。私の考え方は馬鹿げているでしょうか？ 単純でしょうか？ むしろ現実的な考え方だといえるでしょう。何故ならば、始めから自分は失敗すると決めつけていると大抵は実際にそうになってしまい、出来ないことを自ら証明するだけです。私はむしろ星を追い求めて、少なくとも山の頂上には到達する人になりたいのです！

もちろん努力もせずに大きなことを成し遂げることは出来ませんが、心配はいりません。私には武器があります。楽観主義と善意という本当に強力な武器です。私は厚い雲の奥にも太陽を見いだすことができるので、真っ暗な闇夜の中でさえもその奥に光があることを信じて進むことができるのです。私はポケットにたくさんの楽観を詰め込むことなく家を出ることは決してありません。私にとって、家の中の安全な場所でじっとしているのはむしろ不可能なことなのです。何故ならば、好奇心が私を突き動かすからです。それは学びたい知りたい見つけたい探検したいという想いなのです。好奇心から、何かが待ち受けているのではないかと、いろいろな場所に見にいってしまうのです。異なる伝統や価値観を持つ異文化の人々と出会うことで得られる、新しい経験や知識によって自分自身を豊かに

するため、遠くへ出かける機会は決して逃しません。そして、お互いの違いの根底にある共通点を発見するのです。

自分の心の中に良いものをたくさん集めることで、それを他の人々に分け与えることが出来るのです。それが人生というものではないでしょうか？ 世の中の美しいもの、そして私達の中にある美しいものを分かち合うのです。貧し過ぎて人に与えるものが何も無いという人は一人もいないのです。物質は本質的なものではありません。本当の豊かさは、利率によって影響されるものでもなく、保有している株とも関係なく、銀行口座に預金出来るものでも、銃を持った強盗が奪うことの出来るものでもありません。 本当の豊かさは、私達の心の中にある宝物です。アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリの著書『星の王子さま』に登場する小さな王子さまが言うように、最も大切なものは目には見えないのです。

私もその通りだと思いますし、他の人々にもそのことを分かって欲しいと思います。自我や欲望が支配する物質世界にあって、しばしば忘れられもしているこの永遠の真理を人々に気づかせたいのです。

人類一人一人は貴い天命を持っています。「私は誰？」「私は人生で何をすれば良いの？」それぞれが自問しなければなりません。それは決して簡単な質問ではありません。答えを探すには自分自身の魂の中を覗かなければなりません。何故ならば、そこにしか答えはないからです。あなたの道はあなたの道であり、あなた自身が地図を見つけなければならぬのです。

私も試みてみました。混沌の中を走り回り、様々な可能性の大海を漂い、いろいろな野望に迷ったあげく、私は自分の真理の一端をつかみ自己実現に至る道を見つけました。自分の長所や才能の在庫を調べ、それらを熟慮と直観をもって精査していると、答えがまるで天から降ってきたかのように現れたのです。あるいは、自分の内側から答えが湧いてきたのかも知れません。人間の魂と永遠で全知全能の天なる神とは何らかの線で直接つながっているの、同じことかもしれません。内なる声は私に道具を取れと勇気づけました。それはペンのことです。

私はその瞬間、神が私という人間を形づくる長所を完璧に組み合わせ与えてくれた、その緻密に計算された計画の完全性を理解しました。私の好奇心、知識欲、理想主義的な樂觀さ、分かち合いの精神、高い真理の探求心、それに加えて、指先まで伝わる私の中に脈打つ創造力の全てです。

私は、どちらを向いても、驚くほど創造的インスピレーションを得ることができます。私の魂や心の中を流れる言葉を、自分の手で書き記さずにはいられないのです。もし自分の書いた文章によって、たった一人の人間にでもポジティブな息吹を吹き込み、その人が人類のために自分自身の長所をいかしてくれるのであれば、私がペンを手にした意味があったと言えるでしょう。

自分の目で確かめよう

(原文は英語)

ジム・ハスケ (25歳)

カタール国ドーハ市
ザ・ラーニング・センター

現在は暴力とは不可分の時代のようなようです。世界のどの地域も、その土地に根ざした暴力抗争問題を抱えています。武力闘争の真っ只中の地域に住んでいようと、何千マイルも離れていようと、私たちは皆、直接的、間接的にその影響を受けています。テロリストが脅迫すれば、国は防衛措置を強化し、よそ者に対して疑惑の目が向けられて行きます。若いイスラム教徒はもはや、仮想敵であり、友人とは見なしえなくなっていました。あご髭をたくわえ、一日に五回アラーに祈れば、もうその人はれっきとしたテロリストなのです。アメリカ政府と、メディアが自国民に若い男性イスラム教徒の悪いイメージを、これでもかと言うほど植え付けた結果、もう、疑いの目で人を見ないことなど不可能になってしまったのです。私は、私の長所および私の現在の生活環境を知らせることが、人々が持っている、若い男性イスラム教徒に対する歪んだイメージを幾分でも和らげることができたらと、望んでいます。

私がカタールのドーハで、障害のある子供の教育者として就職することを知った友人は、私に色々な質問をしてきました。単なる仕事の内容に対する質問もありましたが、多くは私を取り巻くであろう文化や地域社会に対する全くの無知から出たものでした。曰く、「自爆テロが怖くないの?」「町中、戦車や兵隊で一杯じゃないの?」「第三世界に住むって、どんなもの?」等々・・・私は、これらの人々の中東社会に対する無知に驚くと共に、今日、メディアを使って人々の観念を操作することなど、いとも、た易いことなのだと感じました。単に夕方のニュースを見て済ませるだけの人なら、次の休暇に中東旅行の予約など、まず絶対しないだろうということです。もしあなたが、パスポートさえ持っていない80%のアメリカ人の一人だったとしたら、そもそもアメリカを離れるなどということ自体ありえないことです。私はまず、自分で経験しない限り、ある文化や地域に対する正確な認識など持ち得ないものだと、強く感じています。

私は大学で歴史と考古学を学ぶ内に、世界に対して興味を持つようになりました。そして、他文化を吸収したいという欲求が高じて、いつか世界中を探索に出掛けようと思決心するに至りました。私の好奇心と冒険心のお陰で、私は、イスラエルのカエサリアに行って、そこでたまたま見つけた、遺跡発掘の仕事をしました。大学での勉強と砂の中での発掘の合間を縫って、私はその周辺の地域を探索しました。国中くまなく歩き回って、私は色々な宗教の人々と話をし、必ずしも融和しているとはい

えない、さまざまな文化が雑多に混ざり合っている現状を肌で感じました。

私の両親は私に、常に忍耐強くあれ、相手の言葉を良く聞け、そして常に相手を理解しようと努めろと、教えてくれました。これらの三つの長所が、出会った人々と交流する時、大きく役立つのです。人は誰でも、その人なりの考えがあるし、物語があります。彼らは、心を開いて聞いてくれる人に自分のメッセージを託すことに喜びを感じ、私は、彼らがそれを喜んで私と分かち合ってくれることが嬉しいのです。

今、私はカタールのドーハに住んでいますが、これらの三つの長所は依然、仕事や地域社会での人間関係で重要な役目を果たしています。カタールの10代の男子学生に歴史や時事問題を教えるとき、忍耐力と相手に対する関心と理解を示すことができるということは、何物にも代えがたく価値があるものです。これらの長所は、私の同僚や友人との交流にも有益です。その人が、イラク人であろうと、パレスチナ人であろうと、ヨルダン人であろうと、レバノン人であろうと、関係ないのです。金曜日の夕方、スークで出会ったエジプト人の男性と話をしたことは、ラマラ出身の友人と話をすることとも、もっと言えば、アメリカから来た友人と話をすることとも、何ら変わりはないのです。私たちは皆、スポーツに興味があるし、政治に不満があるし、愛する家族が明日も安全であるように願っているのです。

私は中東に住む機会を与えられ、世界の中で、「後れた」とか「邪悪」とかいうレッテルを、実に多くの人から貼られた地域を経験することができたことに感謝しています。私が家族や、友達や、見知らぬ人々に伝えた話が、この地域に住む一人一人の人間に対する、より肯定的なイメージを作り出す事に、少しでも役立って欲しいというのが、私の唯一の望みです。いつか彼らもパスポートを取りに行って、中東とはどんな素敵な所なのだろうかと、直接見に来るかもしれません。どのみち彼らには、ただで泊まれる所(私の家)があるのですから。